

## 第2章

### はじめに

卒業生調査においては、卒業論文・卒業研究に関する質問を設け、執筆する過程で、学んだこと、得られたこと、経験してよかったことについて尋ねている。ここでは、卒業論文に関する自由記述回答から、どのような特徴や傾向がみられるかという把握と、把握のための手法が適切に運用できるか、その確認を目的とした。

### 対象のデータおよび手法

対象とするデータは、令和元(2019)年度から令和4(2022)年度にかけての回答とした。本設問は任意回答であり、まとまった量のデータを確保するため複数年度を対象とした。

形態素解析を行った後、単独では解釈に寄与しない単語、キーワードとなりにくい単語をストップワードとして設定し、解析・可視化の対象から除外した。また、一つの単語として意味を持つものをリストとして定義した。例えば、“卒業”と“研究”はそれぞれが一つの単語カウントされることがあるため、“卒業研究”という一つの単語として定義している。そして単語のカウントと結びつきの強さを見るため共起ネットワークを構築し、結果を確認した。

### 結果および考察

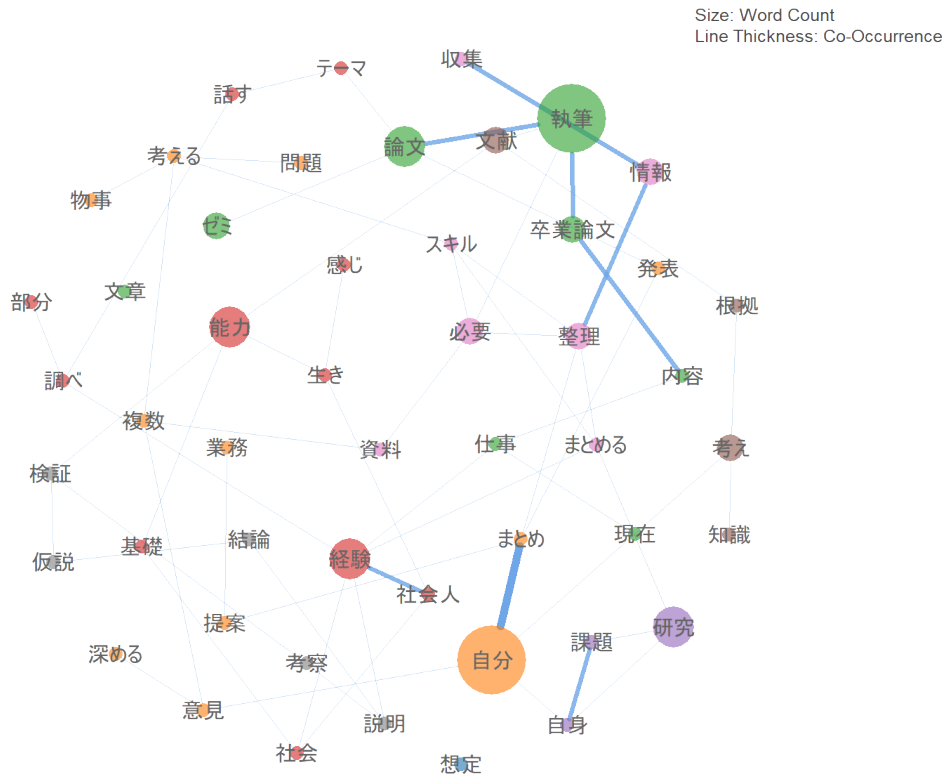
図1から4は自由記述に見られる単語から共起ネットワークを構築したものである。テキスト内で出現頻度の高い単語は、大きなノードとして表現され、ノード間の強い結びつきは、太いエッジで示される。ノードの大きさ、エッジの太さを中心にみることにした。その結果、およそ以下のような特徴が見られた。

学部名	出現頻度の高い単語と結びつきの強いもの
法学部	“自分 - まとめ”、“執筆 - 情報 - 収集 - 整理”
経済学部	“論文 - 書き方”
文学部	“力 - 書く - 文章 - まとめる - 進める”
理学部	“自分 - 考え”、“力 - 文章 - 考える”、“大勢 - 前 - 発表”

法学部、経済学部では“情報”、“収集”、“整理”あるいは“書き方”のように、論文作成に直接関係すると考えられる単語が並んでいる。一方、文学部、理学部においては、大きなノードとして“力”が上がっており、それに複数のノードが結びついている。汎用的な力と捉えられる単語が並ぶ。

これらは学問分野の特性が単に現れただけともとれるが、“ディプロマ・ポリシーに沿った能力”が身についたのかという観点からみると、形態素解析と共起ネットワークによる可視化は、卒業論文の位置づけや寄与度を把握するうえで有用と考えられる。

### 図1 法学部



### 図2 経済学部

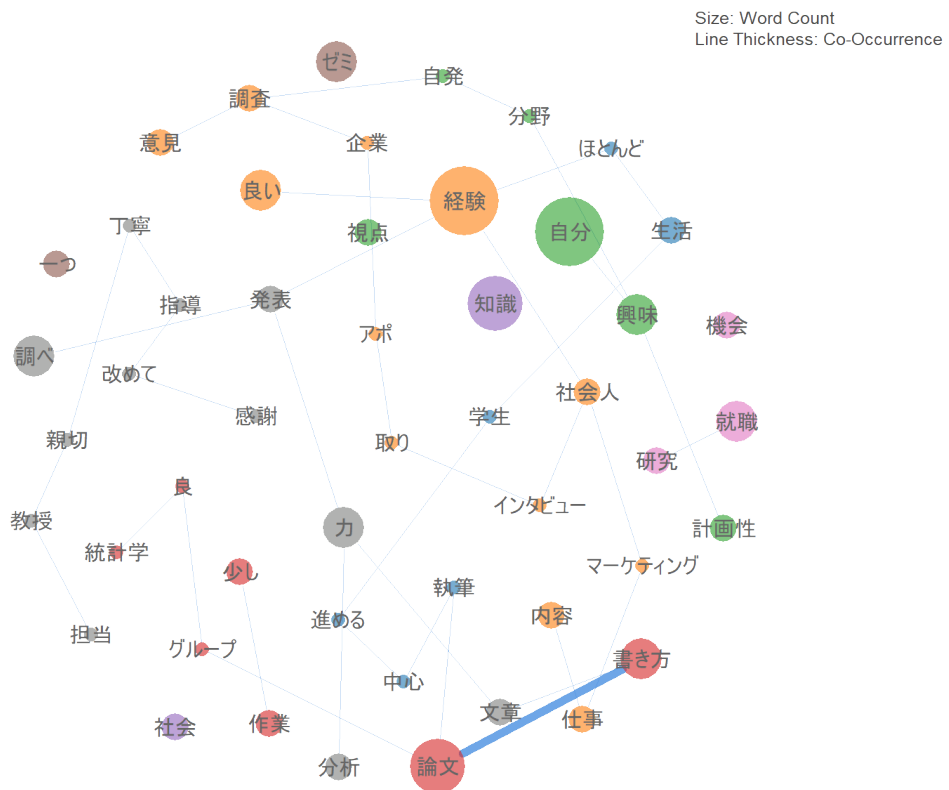


図3 文学部

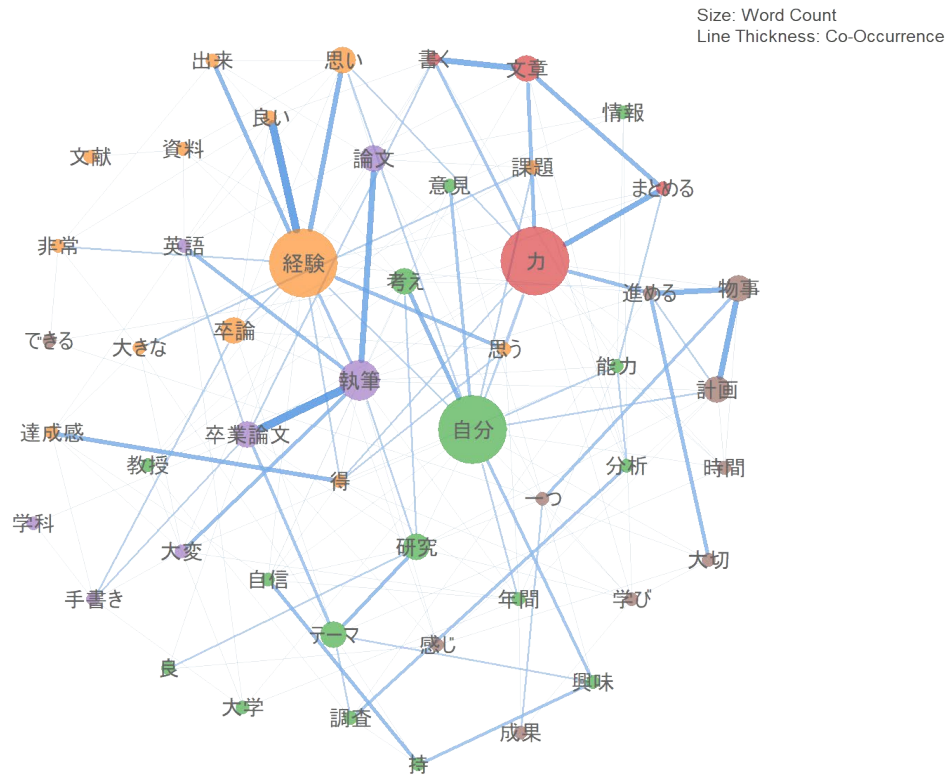


図4 理学部

